

ライフワーク

2020. 3. 18

以前この校長だよりNo. 1 2とNo. 1 3の2号にわたり、私の中学時代の恩師であるY先生について記した。梁川にお住まいなので、そのうちご自宅に伺おうと考えていた。すると、先日、学校に一本の電話が入った。すぐにY先生だとわかった。懐かしい声は昔と変わっていなかった。

結局、私が伺うのではなく、Y先生が学校の方に来てくださった。はつらつとした御表情は昔と何も変わらなかった。校長室でいろいろな話をお聞きすることができた。その中で、一番印象に残っているのが「ライフワーク」という言葉である。

Y先生のライフワークは、「子ども」と「女性」である。今までの先生は、まさしくこの2つに人生を捧げてきたと言える。きっかけは、ある女子生徒との会話だったのだとお聞きした。先生の教員人生は、何かに導かれるように、この2つのライフワークのために歩みを進めている。中学時代にお世話になったときもそうだが、人としてのエネルギーが違うように思う。今思うと、私が卒業した中学校は、学年3クラスの決して大きな学校ではなかったが、すばらしい先生方がいらっしやった。教師としての熱量が違っていたと思う。

Y先生のお話を伺った後、改めて自分で考えてみた。自分にライフワークと言えるものがあるのか。30年も教師を続けてきたが、結局何を残してきたのか。確固たる信念はあったのか。思い返してみると、長いスパンで長期的な見通しをもって何かをやってきたというよりは、常に一年勝負であったように思う。数年先を考えていないわけではないが、4月から3月の一年という期間を大切にしてきた。

これは、異動の度に自然と身についてきた習性のようなもののように思う。小学校で教員人生をスタートさせたかと思いきや中学校へと異動になった。そこから毎回予想もしていない勤務先へと異動になる。然るに先の見通しがもてない。とりあえずこの一年頑張ってみようかとなる。

こんな状況でも、生徒にこうなってほしい、こんな力をつけさせたいというものはあった。こんな国語の授業をしたいというものもあった。だが、Y先生のようにライフワークと呼べるものはない。どれも中途半端な気がする。とことんというレベルではない。こんなことを考えていると、Y先生の偉大さを思い知らされる。

話は多少ずれるが、野村克也監督は生前、数々の名言を残している。その中に、「金を残すのは三流、名を残すのは二流、人を残すのが一流」というものがあつた。教師という仕事について考えてみる。そもそもお金を残すのはむずかしい。名を残すのはある程度ならできないことはない。教師の最大の魅力は、やはり人を残すことができるという点である。そう考えると、やりがいのあるすばらしい職業だと再認識することができる。

では、自分はこの30年の間に、人を残すことはできたのか。昔から、すばらしい教師は、このことを成し遂げてきている。私の恩師もそうである。今までの人生をやり直すことはできない。そうであれば、これからのことを考えたい。今からでも遅くはないであろう。これからは、今まで以上に人材育成、人を育てるということを考えていきたい。人を育てながら自分も成長していくのである。Y先生は中学校以来、何十年も経ってからも、いまだに教え導いてくれるのである。感謝とともに先生の恩に報いるためにも自分なりに努力をしていく決意を新たにすることができた。